


安全性と作業負担を考慮した現場改善活動を継承し、継続させるための試み		
ガイドラインステップ	キーワード (6つ以内)	・職場改善 ・改善の継続 ・新人教育
5・8		
改善・取組みの背景と課題	<p>重量製品を製造する当該職場は、けが等の安全と重労働による腰痛等の筋骨格系の問題が従来からあり、さまざまな取り組みが行われていた。</p> <p>とくに最近、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.従業員の高齢化がすすんで平均年齢が上昇し、安全と負担の問題が更に大きな課題となってきた。 2.組み立てや溶接等の工程では技能が求められ、高齢化した熟練労働者を継続雇用するためにも安全確保と負担軽減がより求められてきた。 3.これまでの対策で、機械化や省力化を実施する工程は数少なくなったが、高齢化が進む作業員にとって、負担軽減はまだ必要な状態にあった。 <p>以上を踏まえたうえで、一層の負担軽減の方向性を総合的に検討する必要がある。</p>	
改善・取組みの着眼点	<p>当該職場では、従来からQC活動が行われてきた。現場改善として取り組んできたQC活動と、労働安全衛生対策として行ってきた現場改善を、可能な限り一体化して取り組むことの可能性を検討した。共通のキーワードを「安全性と健康確保の改善は作業性の確保(作業効率)に結びつく」とし、この立場から人間工学的な改善対策とする視点を据えた。</p> <p>今回の取り組みは、新たな改善をする前に、これまで改善してきた箇所、工程、機器等がどこか、どういう視点から行われたかが誰にでも分かることを周知、徹底(一部は従来から試みられていた)することにした。</p> <p>これまでの負担軽減「改善」活動を目で見えるようにし、改善の継承をねらいとした。</p>	
改善・取組みの概要	<p>安全性、健康性そして作業性を考慮して改善された事例を職場で共有し、継承し、発展させるために、これまで改善した箇所等を作業員が自覚できるように、その箇所、その機器を「色」で識別できるようにした。</p>	

<p>写真・図表・イラスト</p>	 <p>いずれも「紫色」で示された部分が「改善」(改良や導入)された箇所等、現場ではその箇所が否が応でも目に入る。</p>			
<p>効果</p>	<p>3枚の写真でその一部を紹介したが、現場作業者のみならず、新たに配置された職制、新採用労働者にも安全と負担軽減活動の履歴が一目で分かり、思った以上の安全衛生教育の素材となった(安全衛生教育としての効果)。</p> <p>過去の改善にヒントを得て、新たな改善に結びつきやすい状況がつけられた(改善の水平展開)。</p> <p>改善された箇所の評価が作業の中で得られ、再度の改善につながりやすくなった(サイクルとしてのリスク評価)。</p>			
<p>このGPSから学ぶためのヒント</p>	<p>現場で取り組まれてきたさまざまな安全衛生対策を活かすためには、現場労働者の協力と参加が欠かせない。労働者にその自覚を作り出すためには、改善の記録、履歴を現場の労働者に分かるように残すことが大切である。</p>			
<p>参考資料</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 大崎秀夫監修、つくる安全 大図鑑、日本プランメンテナンス協会、2000. 9. 2. 神代雅晴編著、職場改善－産業保健人間工学の知恵と妙技－、日科技連、2008. 4. 			
<p>投稿者</p>	<p>近藤 雄二</p>	<p>e-mail</p>	<p>hygiene@sta.tenri-u.ac.jp</p>	<p>2008年 7月 31日</p>